The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代学生の形成的自己像 : 阪大人間科学部生のレポートから
Author(s)	平野, 正久
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2000, 26, p. 1-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4613
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代学生の形成的自己像
―― 阪大人間科学部生のレポートから ――

平　野　正　久

目　次

Ⅰ　はじめに―― 本稿の課題 ――
Ⅱ　遺伝的要因
Ⅲ　家族
Ⅳ　学校
Ⅴ　その他の諸要因
Ⅵ　むすび

現代学生の形成的自己像
―― 阪大人間科学部生のレポートから ――

平野　正久

Ⅰ　はじめに―― 本稿の課題 ――

現代の学生たちは、どのような自己像をもっているのだろうか。自分自身をどのように認識し評価しているのだろうか。

大学教師として、日頃、それなりに彼らとつきあってきているはずの筆者にとっても、世代的な隔たりもあり、学生たちは身近なようでいて、なかなかにとらえがたい存在である。

上記のような思い（問題意識）を持ち続けてきた筆者は、はからずも、数年前にこのテーマを考究する上での手がかりをうる機会に恵まれた。それは、担当授業の評価資料の一つとして、学生たちから「自己形成史の叙述の試み」を内容とするレポートを提出してもらったことである。

４年前（平成７年度）の前期、阪大人間科学部に入学したばかりの一回生を対象として、専門基礎科目（必修）である「人間科学概論Ⅲ（人間の形成）」を担当したが、その講義内容の概略は、それを予告した授業計画書（シラバス）の記載によれば、次のようなものであった。

「人間とは何か」という問いは、われわれ人間にとって、自己自身を考察対象としたものであるがゆえに、最も究めがたい問いであるともいわれている。この大きな問いに対するアプローチは人間科学の諸分野に応じて極めて多様でありうるが、本講義においては、人間科学としての教育学の立場から、人間の問題をとりわけその「生成」と「形成」という基本的な視点から考察してみたい。ヒトが人になる（生成）と、ヒトを人にする（形成）という二つの相（アスペクト）のもとで人間を探究しようとする点に、教育学ないし教育人間学の基本的な特質があると思われるからである。この二相の統合的視点における探究の重要性は、人間の問題を考えるにあたって、系統発生的にも個体発生的にも当てはまるであろう。

本講義においては、まず、人間の生成と形成という問題を、固有な生物種としての人類の誕生と発展の問題として、地球上における生命の全歴史の中に位置づけて、いわば自然史的に考究してみたい。ヒトが霊長類の共通の祖先から分かれて、いかにし

て人類としての独自な道を歩み始めたか。そのことを可能にしたのはいかなる諸条件であったのか。その過程で、ヒト（人類）はいかなる諸能力を獲得し、いかにして固有な文明世界を築きあげながら、いかなる社会的・文化的・人格的な存在にまで自らを形成してきたのか。そのさい、現代文明の危機を念頭に置きつつ、母なる自然との共生・共存という重要な課題を考察する必要があろう。

次には、現代社会における人間の生成と形成の問題を、とりわけ個人の人生史（ライフヒストリー）の課題として問い深めてみたい。人はだれでも、その両親から固有な遺伝的諸要因を受け継ぎながら、それぞれに特有な環境的諸条件のもとでその生の営みを始める。その意味で、あらゆる個人の人生は所与の要因や条件を出発点としているのだが、そのような被規定性にもかかわらず、人間はそれぞれ自己のかけがえのない人生において真の主人公となりうるといえるのであろうか。現代は生涯発達の時代であるともいわれ始めているが、このような課題状況を意識しつつ、上のような根本問題を取りあげ、人間の主体的で創造的な自己形成の可能性に焦点をあてながら、人間の生成と形成のダイナミズムの問題として、人間における発達と教育との基本的かかわり合いの課題として、考察を進めていきたい。

実際に行なった講義の内容はいささか不十分なものであったが、夏休み直前の講義日に、評価資料の一つとして、次のようなテーマのレポート課題を提出した。分量は2000字程度（上限なし）とし、形式（用紙、縦書き・横書き、手書き・ワープロ書き等）は自由とした。

これまでの自分の人生の歩みをふりかえり、現在の自分をつくってきた諸要因について考察しながら、「自己教育力」の形成という問題をもふくめて、自己形成史の叙述を試みなさい。

レポートは、9月の最初の講義日に提出してもらった。事情により、その日の提出が間に合わずに、若干の遅れで郵送されてきたものもあったが、一回生142名（男子60名、女子82名）のうち、提出しなかった者は男子1名だけで、総数141通のレポートが集まった（女子のうち、1名は台湾からの留学生）。なかには4000字以上書く学生も相当数いたので、400字詰め原稿用紙に換算すると、総計750枚をこえる分量のレポートであった。

受け取ったその日から早速に読み始めたが、その記述内容に強く引き込まれた。まず、多くの学生たちが提示された課題に真摯に取り組み、自分の人生史におけるプライベートな事柄についてまでオープンに表現してくれていることに驚きにも似た感情を抱かされた。現代の若者に対して「しらけの世代」などという形容がなされて久しいが、そのような風評とは非常にかけ離れた感じのものであったからである。レポートの内容は、第三者の他人である教師が読むということをほとんど意識していないのではないかとさえ思われるものが多かったが、それだけに、一学期間、講義の場で接してきただけの関

係であるのにと、彼らが寄せてくれた信頼に感謝したい気持ちでいっぱいであった。

大教室で教壇から見渡しているときには、同じ大学の同じ学部に集まってきた同学年の学生たちということで、一見均質な集団のように見受けられたが、レポートを読み進む中で、当然のことながら、実際には、一人ひとりが異なる独自な人生を歩んできた個性的な存在であることが強く感じられるようになった。まさに十人十色であり、百人百色である。しかし、そこには同時に、現代に生きる若者として何らかの共通な傾向性ともいうべきものが有るかもしれないという思いも否定できなかった。

これらのレポートを資料にして、それを分析し解釈することによって、筆者は学生たちの形成的自己像を捉える試みをしてみたいという願望を抱いたが、彼らが学部に在学中である間は、何か心理的ためらいのようなものもあり、実行に移す決心がつきかねていた。しかし、今春(平成11年)、彼らのほとんどが卒業し、新しい世界に旅立っていったことを機に、上記の課題に取り組んでもいいのではないかと考えられるようになってきた。それゆえ、本稿においては、プライバシーに抵触することのないように留意しつつ、上記のテーマについて論究してみようと思う。

そもそも筆者が一回生の学生たちに「自己形成史の叙述の試み」という内容のレポートを課したのは、「人間は、発達の過程にあるものとして自分自身をとらえないかぎり、自己を正しく理解することができない存在だ」[1)]というテーゼに導かれてのことである。これは、戦後西ドイツの代表的教育学者の一人であったハインリヒ・ロート（Heinrich Roth, 1906－1983）[2)]が主著『教育人間学』第Ⅱ巻において書き記した言葉であるが、彼はまたその少し後で次のようにも述べている。「人間は自分自身の伝記をよりよく理解することによって、自分自身の確固たる主人公になることも可能となり、自己の使命および行為能力をもつ人格としての自己のアイデンティティーを発見することもより容易となるのである」[3)]。

周知のように、アメリカの精神分析家エリクソン（Erik H. Erikson, 1902－1994）が独自なライフサイクル論の重要な部分として提起して以来、アイデンティティーの確立は青年期の重要な発達課題であると見なされてきたが、大学の一回生はまさにその課題に直面している人生段階にあるといえよう。それゆえ、このような問題性を意識しつつ考察を進めていきたい。その際、学生たちが感じ考えている内容をできるだけ正確にとらえる意味で、彼らの「生の声」を重視したいため、第一次資料であるレポートからの引用が多くなることを予めお断りしておきたい。

Ⅱ　遺伝的要因

人間はだれも両親双方からの遺伝情報を受け継いでその生を始める他はない存在であるが、これは生物学的事実であるだけでなく、人間学的にも重い意味をもつ事実であろ

う。

およそ40億年ほど前、地球上に最初の生命が誕生して以来、生命は、個体から個体へと遺伝情報を受け渡しつつ、環境の変化に立ち向かう仕方で、長い進化の道を歩み続けてきた。500万年ほど前、一生物種としての人類が共通の祖先をもつ大型類人猿から別れて独自の道を歩み始めてからも、この生命の大原則からはずれることはなかった。

今世紀の後半に入り、遺伝情報を担う本体であるDNA（デオキシリボ核酸）の構造が発見されて以来、遺伝学は分子生物学レベルでの飛躍的な発展を遂げ、今や人間の全遺伝情報の解読というところまできている。さらに、人間の遺伝については、発達心理学の分野を中心に、双生児研究などを通して、相当精度の高い解明が進められてきているといってよい。

さて、人間形成の問題を考える場合、遺伝的要因は、個人の生にとって、出発点におけるいわば前提的な所与というべきものであろう。それゆえにというべきであろうが、自己形成の要因としては考察対象として意識に上りにくい性質のものなのかもしれない。実際に141通の学生のレポートのうち、遺伝的な要因について明示的に言及していたのは10通に過ぎなかった。これは意外に少ない数だと思われるが、その一因は、課題文「……現在の自分をつくってきた諸要因……」のうちの下線部分の表現にあるのかもしれない。

学生たちの自己認識の内容を知るため、代表的な例をいくつか引用してみたい。

まずは遺伝的要因の役割を率直に認めている例。

「人は遺伝子というもののために、生まれてきたとき既にいくつかの人格が決定されているのである。父方、母方の遺伝子によって、両親にきわめて類似した人格を私は受け継いだと思う。」(男子)

「小さい頃から18歳の今日まで、私という人間の基盤となっているのはやはり遺伝的な性格(性分)であると思う。気の強さ、怠け者の割に負けず嫌いなところ等々、私の性格は父にそっくりなところがたくさんある。顔が似ていると気性まで似るのかどうかは知らないが、私は顔同様、気質もどちらかといえば父似である。おそらくこれは一生不変だろうし、私が将来子供を産んだら、また似た気質をもった子がいるだろう。」(女子)

「私の父も短気であるので、私が短気であるのは遺伝的要素があるのかもしれない。」(男子)

次には、遺伝的要因といわゆる環境的要因の両方を挙げている例を引用してみる。

「私と妹とは一卵性双生児で（中略）双子の妹と性格的に似通っている部分は多々あると思うが、似ていない部分も多少ある。このことから性格は遺伝的なものも、環境によるものも持ち合わせていると感じる。」(女子)(コメント：自身が一卵性双生児の片方として成長してきた体験をふまえた発言には一定の重みがあるように思われる。)

以下に引用する二例は最も典型的な代表的意見とみなしてよいものである。

人間の性格を形成する要因には大きく二つのものがあると述べた後で「一つは、親達から遺伝という形で伝えられたもの、先天的要素である。(中略) しかしまた、性格は、生育環境や周囲の人間関係などによって様々に変化しうる。これらを後天的要素と呼べるだろう。人は、成長していくにつれ、その性格により大きな違いが出てくることから、後者は前者をしのぐ程の影響力を持つことがわかる」と記している。(女子)

「私が生まれてからこれまで成長してきた中で、一番私に大きな影響を与えているのはやはり両親である。単に顔つきが似ているというだけではなく、話し方、考え方、性格までもどこか似たところがあるようだ。これらがどこまで遺伝的なものでどこまで環境的なものかは定かではない。顔つきなどは多分に遺伝的な要素が強いと思われるが、性格に関しては、これは遺伝するものだろうか。もしくは両親のつくる家庭の雰囲気であるとか、環境的な要因であることも考えられる。私はどちらかというと後者をとりたい。もし私が生まれてからすぐ両親と離され、まったく別の環境で育っていたら、まったく別の性格になっていただろうと考えるからだ。」(男子)

上記の二例はいわゆる遺伝的・先天的要因と環境的・後天的要因の二つを挙げつつ、人間形成（性格形成）においては後者の相対的な重要性を強調するものであるが、現代の学生たちにおける最も典型的な見解を示しているものと評定してよいであろう。

Ⅲ　家族

人間形成の規定要因を問題にする場合、通常、上に述べた「遺伝」とともに挙げられるのが「環境」という要因であろう。しかし、この環境という概念はきわめて多義的かつ包括的な概念であり、それを使用して論述を進める場合、その意味内実ないし意味範囲をその都度きちんと規定しなければならないと思われる。

人間はだれもある特定の環境条件の下に生まれ、育つ。ある家族、ある地域社会、ある国、ある歴史的な時代等々であるが、環境という語には、まず専らこのような意味での「生育環境」を指すという狭義の用い方がある。この場合の「環境」は、遺伝と同様に、個人にとっては選択の余地のない、所与のものといえるであろう。と同時に、人間形成にかかわる生物学的・遺伝的な要因以外のすべてを環境という一語で表そうとするきわめて広義の使われ方も見られる。しかし、例えば友人との関係を想定してみた場合、その間に生じる相互生成ないし相互形成という力動的な事象を理解するには、環境という、いささか静的なイメージの強い概念では不十分だというべきであろう。また、「環境を変える」という表現に込められたような、発達主体としての個人にとっての選択の可能性という問題も入ってくる。

以上のような使用状況を考慮し、本稿ではこの概念を用いることはしないで、人間形成史の一般的な順序に従い、その要因として具体的に家族や学校などの順で考察を進めいていきたいと思う。まず家族を取り上げるが、自己形成の基本的要因としての家族に

ついての学生の意識を示す典型例を引用しておこう。「この家族が、私を形成した、最も基本的で最も普遍的な要因である。慣れない環境の中で神経をすり減らして帰ってくる私を暖かく包んで疲れをいやしてくれたのも家族であったし、時には厳しく、しつけ、教育してくれたのも両親、特に母である。子供の頃にはただ意味もなく怒られていると思い込んでうっとうしく思ったりもしたが、今こうして考えてみると、すべてが今の自分の形成に大きく役立っている。」(女子)

1．父母

1）母親

「最も私と深く関わり、私の人格形成に影響を与えた人は母だと断言できる」という一女子学生の言葉に端的に表されているように、人間形成にとって、一般に母親からの影響や母親との相互作用はきわめて大きな位置を占めているといえるであろう。

「たいていの場合、生まれてから幼稚園に入るまでの子供に対する影響力が一番大きいのは、家族、特に母親だろうと思う」(女子) という認識に示されているように、一般に人間の生涯を考えた場合、その出発の時期である乳幼児期（胎児期を含めて）において、母親とのかかわりはきわめて密度の高いものであるといえる。しかし人間の記憶が明確なかたちで遡れるのが、通常は、せいぜい４・５歳位までと言われていることとも関連してか、学生たちのレポートにおいても、乳幼児期における母親からの形成的影響についての具体的な記述はあまり見られなかった。

さて、母親に関する記述内容を読んでいて最も印象深く感じたのは、女子学生の場合がほとんどなのであるが、母親を人生における同性の先輩として尊敬し、肯定的ないし理想的なモデルとして捉えているものが少なくないことであった。しかも、そのような娘の尊敬の対象となっているのは、ほとんどが職業を持ちつつ子育てをおこなってきた母親である点に特徴が見られる。代表的な例をいくつか引用してみよう。

「19年間を通じて私に最も大きな影響を与えてきたのは母である。母は主婦であり、店の経営者である。スポーツ好きで、読書が趣味。人の好みが激しく、しんどくても無理をしてしまう。これはそっくり私にも当てはまる。私たちは性格がそっくりなのだ。（中略）母は『出来ないことはない』と豪語する強い女性である。母のおかげで、私は早くから女性の自立について考えるようにもなり、自分にも強さを求めるようになった。」(女子)

「母はまじめな人で、仕事は助産婦をやっているのだが、仕事に熱心である。小・中学生の頃私ががんばっていたのは、母の影響もあるかもしれない。」(女子)

「私の母親は看護婦をしており、いわゆる共働き夫婦である。（中略）当時の私の目には、働いている母親の姿はとても新鮮に映った。てきぱきと仕事をこなし、指示を与える母親は、他の同じ年代の女性とは一味違う雰囲気を漂わせており、実際の年齢よりも若々しく見える。私はそんな母親を誇りに思っている。また、帰宅して家に誰もいな

いと、やはりさみしさを感じたが、母親の愛情が足らないと思うことは全くなかった。逆に、普段ずっと家にいない分、私の中での母親の存在感は非常に大きいものになった。それは現在も変わっていない。家庭で見ることのできない母親の一面を見たこと、他の友達より接する時間は短いけれど、その分多く愛情を注いでくれたこと、この2つのことは、私に確固たる母親への尊敬と愛情を抱かせる原因となった。」(女子)

また、母親がさまざまな関心へと導いてくれたという精神的影響を述べている事例を二つ挙げておこう。

「自己形成への影響や刺激を与えてくれた人はというと、まず両親があげられる。(中略) 特に私の場合、母が心理や教育に関心を持っている人であったので、関連する新聞記事や本などについて、話をしたり、勧められたりしてきた。例えば、私にかなりの浸透力があったのは、河合隼雄さんの本や読みものである。」(女子)

「その多くは教師をしている母が話してくれたものだが、障害者問題や在日朝鮮人問題など社会の矛盾に気づきはじめたのもこのころである。これまで与えられたものだけの中で生きてきた私にとって、この中学校時代の体験は直接今の私につながるものとなった。」(男子)

次に、以上のような肯定的諸例とはいわば対極にあるものとして、母親に対する批判的なまなざしが示されている例をいくつか挙げてみたい。

まずインパクトが強かったのは、一男子学生のレポートであるが、それは、幼児期における象徴的なエピソードから始まる。夕食の準備に際して、手伝いを命じられた彼が、母親の期待通りに動けなかったため、母親がヒステリックな怒りを爆発させ、暴力を振るったうえ、幼い彼を冬の戸外に放り出した。その間、必死の思いで助けを求めた父親はへらへら笑っているだけだった、という。この事件を振り返りつつ、彼は「『母親より優れた体力と知力を持ちたい』という願いが私を強くさせました。中学になってやっとたたかれることがなくなったあの日、私は本当に幸せでした」と述懐し、さらに総括的に次のように述べている。「フロイトの説に、エディプス・コンプレックスがありますが、私にとって母は常に戦うべき強大な敵であり、決して恋慕の対象となりませんでしたし、父は無力な存在でした。しかしこの状態が私を少々ダメにしたのは確かです。(中略) 精神はとても不安定なのです。」

これも男子学生のレポートだが、自分の性格特性として「短気」を挙げ、その形成要因として、「私が幼い頃、母はかなりヒステリックな性格だったから、それが影響しているかも、と思う」と捉え、さらに「反骨精神」という特徴の由来について、「この性格がどこからきたのか考えてみると、母と強くつながる。私が幼い頃、母は非常に厳しく、専制君主のようだった。その幼い頃の不満が、私が母より大きくなって一気に噴出し、反骨精神につながったのでは、と思う」と解釈している。

次には、母親をいわば反面教師と見立てて自己形成を試みてきたという例を挙げてみたい。これも男子学生であるが、「消極的な面がある」ことを自分の性格の特徴として

指摘し、その形成要因について次のように考察している。「私の親、特に母親は非常に強引で、気の強い人であった。幼少の頃からそのような態度の下で生きてきた私は『そんなに強引にするのはよくないことだ』との考えを抱きはじめ、強引さを受けている相手の人の方を気づかったり、周りの人目を気にするようになっていた。こういうところから私の母親とは逆の消極性が生まれたのだろう。」

これは女子学生のレポートである。「幼い頃から、私はよく母の苦労話を聞かされてきた。(中略) その話の中にある母自身が選んだ人生に対する後悔の思いに、ずっと反発を覚えていた。(中略) 母のすべてをネガティブに悲観的に考える姿勢に疑問を感じたのだ。母の立場のつらさなどを比較的理解しはじめてきた今も、その思いだけは変わっていない。だから、よい意味でも悪い意味でも私は楽観的に生きようとしているのである。」

2）父親

学生たちのレポートを読む限り、父親に対しては批判的・否定的なものが多かった。とりたてて父親を尊敬しているもの、父親からの肯定的な影響に言及したものは見あたらなかった。代表的な事例を２つ挙げておこう。

「昔から、両親がけんかをするのは何度も見てきたのですが、まだどちらが悪いかの判断もつかず、ただ怖がっていただけでした。しかし成長すると両方の言い分を聞いた上で、どちらが悪いかというのは明らかにわかるようになりました。主な原因は、父親が母親にだまって多額の借金をしていたり、浮気をしていたり、私はこれで父親を尊敬できなくなりました。(中略) 私の父親は何度も同じことを繰り返す人です。その度に母が苦しんできました。」(女子)

「あまり身内の恥は話したくないんですけど、今の僕の性格の大部分を決めた要因ですから、どうしても外せません。父親は一言でいうと外道です。大酒飲みとかギャンブル狂とかいう訳でなく、一流会社のサラリーマンなのですが、どういう訳か道徳的な感情がポッカリと抜けていて、家族に多大な迷惑を与えました。特に母親は最も苦労し、そのせいか昨年重病にかかりました。僕も自然と皮肉屋になっていました。(中略) 非行に走らなかったのが不思議な位です。」(男子)

以上の他、父親についての記述を二つだけ引用しておきたい。

「父については、ひどくしかられた記憶がおおく、怖い存在である。だから自然と、できるかぎり父とかかわりたくないと考えてしまう。」(女子)

「親、特に父親であるが、非常に甘やかして育てられたように思う。(中略) 自分は偉いのだ、という自惚れだけがあったが、それは、やはり父親のおかげのように思う。家庭の中で、いつも『お前は偉い、他の人間とは違う』という、一種のマインドコントロールのようなことを言われ続けていたのである。(中略) 私は非常にワガママな女王サマだった。」(女子)

世の中には尊敬に値する父親もいるはずだと推測されるが、もしそのような父親がい

たとしても、その存在はいわば当然のことで特別に書く必要が感じられないのだろうか。いささか不思議な気もする。

3）両親との関係

子どもにとって両親との関係で最も重要で本質的な点は、その存在をあるがままに受容し、全的に認めてくれているかどうかということにあるように思われる。そのような視点から学生たちのレポートを検討すると、この要件が欠けている場合、あるいは少なくとも子どもがそう意識している場合、子どもの人間形成において、深刻な葛藤や不安が生じることが読みとれる。

女子学生のレポートから。「親と暮らしていた頃は、自分は親から愛されていないと感じていた。もちろん親にしてみれば、自分の子として愛情をもっていたのだろう。しかし、幼い子には伝わらなかったようである。彼らは、私に大人であることを求めた。（中略）何でも自分でするようにしつけられ、親に甘えた記憶はない。（中略）自分の中にある、失敗を極度に恐れるあまり、最後に一歩を踏み出せない消極性と、人の顔色をうかがって行動を変える傾向は、この時期に形成されたと思う。（中略）自分の親から愛されていないという、子どもにとって絶望的な考えを否定するため、彼らは自分の本当の親ではないと思いこみ、自分の立場の正当化をはかった。しかし、事実は事実であり、彼らは紛れもなく自分の親である。『自分の親からも愛してもらえない、駄目な人間』という劣等感は、今でも根強く残り、自分を卑屈にしている。」

類似した内容のものをもう一つ引用しておこう。「私の両親は、よく大人が子供に対してするようにベタベタはせず、どこか冷めた、距離を置いた態度で娘に接していた」が、「どこか満たされない思いが、（中略）ひっそりと胸の奥に潜み続けていた」のであり、「そのことを徐々に意識するようになった理由は、両親（といっても主に母親）が決して褒めてくれなかったということである。それどころか、欠点をあらいざらい指摘し、なるべく自分に対して自信を持たないようにしむけるのだった。傲慢にならないよう、自分に対して謙虚になることを教えてくれているのだとは、小さい頃は思いもしない。ただただ、自分を認めて欲しかったのである。子供にとって、親が自分の努力、実力を認めてくれることは、大変な喜びであり、何にも勝るものだと思う。しかし、その経験を持てなかったために、他者との関わり合いにおいて極度の疎外感、劣等感、自己嫌悪を感じるようになってしまった。そして、必要以上に自分を卑下し、自分を痛めつけるという、いくぶん不安定な性格が形成されたのである」（女子）と記されている。この魂の叫びに耳を傾けたい。

2．兄弟姉妹

人間形成ないし人格形成のあり方は、家族構成における兄弟姉妹関係によって強く影響されるといわれている。

そのような意味で、学生たちのレポートにおいても、当然ながら兄弟姉妹関係におけ

る多様な事柄を重要な自己形成要因として取り上げているものが少なくなかった。

三年次の春に提出された「個人調査票」によれば、現代の核家族化の動向を反映して、自分を含めての２人兄弟（以下、「兄弟姉妹」を「兄弟」で代表させる）が一番多く55％強であり、次が３人兄弟が35％強、この２つを合わせて90％を越え、後は急に少なく、一人っ子が６％未満、４人兄弟が３％未満であり、それ以上の兄弟数を記した者はいなかった（若干の未提出者がいるので、以上の数字は正確なものとはいえないが）。

兄弟関係の様態とそれが個人の人格（人間）形成に及ぼす影響もまさに千差万別であるが、学生たちの記述内容を斟酌し、敢えて類型化しつつ、共通の傾向性のようなものを引き出してみよう。

まず、第一子の長男・長女として生育した者であるが、一家の最初の子どもとして大事に育てられ（しばしばいささか神経質なほどに）、弟や妹が生まれると、周りの大人たちから兄や姉としての役割が期待され、年齢差などにより、若干の葛藤を経験する場合が少なくないものの、多くは、兄的ないし姉的な役割取得を達成しつつ、次第に弟・妹たちの手本となるという価値意識を内面化していく。典型的な例を２つばかり挙げておこう。

「私には１つ年下の弟がいる。おかげで私はすぐに母親を弟と共有しなければならなくなった。母は私をよい姉で弟の面倒をみていたというが、私はその頃弟に妬みに似た気持ちを抱いていたことを覚えている。本当にかわいいと思って面倒をみたのは４つ年下の妹のときからである。（中略）私が長女であり、下の子の模範であることを必然的に要求されたこと、父方の初孫であり、期待を多分に受けていたことも、今の私を作っているだろうと考える。私は“良い子”でいることを望まれていたし、自分もそうであろうと小学４年頃までは思っていた。」（女子）

「私は長女として、第一子として誕生している。非常に甘えん坊であり、かわいがられた記憶がある。２才の時に妹が生まれた。これが、私の自己形成における最初のポイントになると思う。（中略）今までは周囲の人々の注目も家族の愛情も独占していたのが、そうではなくなる。“お姉ちゃん”という目で見られるようになる。この周囲の変化によって、私自身が変化させられていったように思う。しっかりしなければ、手がかからないようにしなければ、幼いながらにこんな意識があったと思う。そしてこのことが、保育園から高校までの“しっかり者”としての私の基盤となったと考える。」

次には、上記と対照的な末っ子の場合であるが、同じ末子でも、兄弟数が２人と３人以上の場合とでは異なる面があるようである。後者の場合が、いわゆる典型的な末っ子気質が形成されることが多く、甘えん坊ではあるが、兄姉たちから自然に学びながらのびのびと自分の道を歩むというタイプが少なくない。子育てに慣れた両親のゆったりとした態度による面も大きいであろう。前者の場合は、兄や姉との一対一の関係が人格形成要因として大きな意味を持つことが多く、兄・姉を手本にしたり、ライバル視したり、時には親からの差別的評価により、強い葛藤に落ち込む場合もあるようだ。

後者の事例を一つ。「私は末っ子の３番目として姉、兄の次に生まれ、家族と出会った。実は、もう子供は２人でいいという父を、母が説得して私を生んでくれたらしい。母が言うには、姉と兄にはこわごわの育児だったが、３番目の私の時は赤ん坊のかわいさをかみしめて育てたので、育児を辛い、しんどいとちっとも思わなかったそうだ。（中略）私の姉兄は２人とも常に前向きで、自分の力で自分の道をさっさと切り拓いて進んで行く人だ。私はいつもこの２人からいい刺激をうけて自分の原動力としてきたし、きょうだい同士で互いに影響し合ってきた。何かあれば３人で相談し合って解決することも多かった。この２人がいなければ、今の自分はもっと視野が狭く、自信のない人間になっていただろう。この姉兄こそが、私の自己形成力を促してくれたのだと思う。」（女子）

前者の事例を３つ。「私が成長する過程で最も大きな影響を与えたものは姉である。幼い頃から上昇願望というのか、負けん気が強かったが、その根底には、姉に負けたくない、という気持ちがあったような気がする。（中略）私の姉は３つ年上で、幼少時の３つの年の差は絶対的なもので、優等生であった姉はライバルであると同時にあこがれでもあった。」（女子）「兄は私より２つ、人生の先輩となる。つまり、私がこれから歩む人生の道を先に歩いてくれるわけだから、かなり妹としては兄の影響を受けざるを得ない。（中略）兄弟は最大のライバルである、と言われるように、私も常に兄を意識していたように思われる。（中略）兄を頼りにしていながらも、負けたくないという、妹特有の性格の典型であると思う。」「私には４才離れた兄がいて、私に多大な影響を与えた。ずっと家に居て兄について回っているうちに、私は兄と話が合うようにするため社会に興味をもつようになり、読書好きの兄に影響されて今では読書が好きになった。社会に対しての興味の対象は今では兄と違っているが、兄がいたお陰で私は社会に興味を持ち、その社会を構成している『人間』と言う存在に興味をもつようになった。そして今私は『人間科学部』にいるのである。もし兄がいなかったら、私は人間に興味をもつこともなく、『人間科学部』に在籍することもないだろう。」（男子）

さらに、前者のうち、葛藤の事例を２つ。「片付けでも、料理でも、兄が年上なだけに上手で、いつも比較され、兄をねたましくさえ思ったものである。何とかほめてもらおうと、毎日必死であった。」（女子）「私は次男であって、私の兄はそれなりによくできた兄であった（これが私にコンプレックスのようになって、今の私に大きな影響を与えていることもまた一つの要因であるが）。親もたいていのことは兄が先に経験をしてから私の番がくる（例えば受験などは特に）ので、兄には力を入れて、私の時にはその要領を心得ているので適当に済ませているという感じがしている。」（男子）

次には、３人以上の兄弟で真ん中という事例。この場合はやはりある種のたくましさが形成されるようである。性別の順もあるが、特にすべて同性の場合は、典型的ないわゆる次男的ないし次女的性格を持つことが多いと思われる。３兄弟の真ん中という典型的な事例を２つ引用してみよう。「私は三人兄弟の次男として生まれた。無論私が生まれた時点では、二人兄弟であるが、生まれた時からいる兄の存在は、私に子供の世界で

いかに生きていくか、という子供にとっては最重要な問題に対する手本と、動物的な子供の世界で、守られながら生きてゆくことができるという大きな安心感を与えた。そして、弟が生まれた。しかし、その時兄が私に与えてくれたものを同じように弟に与えるという考えは浮かばず、漠然とした不安感と危機感が心に広がった。(中略) かくして、我々兄弟三人の生活がはじまったが、三人兄弟の真ん中という私の立場上、両親から注目されるのは、兄や弟に比べて少ないように思えた。実際のところは、両親は我々三人に分け隔てなく愛情を注いでくれたが、このような環境の中で、私の日々の最大の関心事は、いかに両親の愛情を独占するか、ということになった。それは、兄弟げんかやいたずらといった形になって表に現れた。」「私は三人姉妹の真ん中になるわけだが、これは自己形成においてかなりの働きをしたのではないかと思う。真ん中というのは誰かに対して上の立場でも下の立場でもある。だから私は幼い頃から姉妹の間で命令する立場もされる立場も、教える立場も教えられる立場も体験していたわけである。」兄弟関係が人間が最初に経験する社会関係であるといわれるが、これらの事例はこのことをよく物語っているように思われる。

終わりに、特殊な兄弟関係といえる一卵性双生児の事例を取り上げてみよう。この学年には、一卵性双生児の片方が、男子・女子ともに一人ずついる。もう一人双子の男子学生がいるが、明記されていないので、一卵性か二卵性かは判明しない。典型的な事例として、男子学生の記述を引用してみよう。「一卵性双生児として生まれたことが僕の歴史の中での最重要項目である。今までの19年間で、親と一緒にいた時間よりも双子の弟と一緒にいた時間の方がはるかに長いであろう。したがって、僕が一番影響をうけてきた人物は弟であろう。僕と弟は他の子どもよりも早くしゃべり始めたそうだが、もちろん僕と弟の会話だった。(中略) 二人は同じ幼稚園、小学校、中学校へと進む。幼稚園に入ってまもなくは、あまり他の子らと遊ぶことがなく、二人で遊ぶことが多かったようだ。現在でも僕は人見知りするタイプであり、友達になるタイミングがなかなかつかめず困っているが、これは僕には生まれたときから『親友』のような弟がいたために友達をつくる必要に乏しかったからだと思う。」一卵性の双子でない他人にはなかなかうかがい知ることのできない特有の世界があるのであろう。

なお、一人っ子の事例において、特に兄弟がいないことへの欠如感のようなものに触れた者はいない、という点は注目に値することかもしれない。

3．祖父母

核家族化が進んでいる現代であるが、学生たちの「個人調査書」によると、約20%が祖父母と同居しているようだ。父母が共働きのため、幼児期を主に祖父母に育てられたという事実を記述したレポートが2点あった。「私の最も古い記憶によると、私はたいへんなおばあちゃん子だった。家族は、父、母、姉、祖母と私の5人で、両親は働いているため、父母といる時間より祖母といる時間の方が長く、姉と私の両方の面倒を見て

くれたのも祖母だった。」(女子)「私の生まれた家庭は中学校教諭の父・小学校教諭の母・衣料品店経営の祖父・英語塾経営の伯母の4人に私を加えた5人家族であった。幼児期の私はこの家庭の中で甘やかされて育てられた。父と母が共働きで家庭に帰ってくるのが遅かったために、私は普段より家にいた祖父と伯母に育てられた。」(男子)

筆者は、高齢化と少子化の進行する現代社会においては、親子の世代を一つ飛び越えた祖父母と孫の世代間における精神的な交流ないし紐帯が重要な課題だと考え始めているが、レポートを読む限り、そのような事実に言及したものは見あたらなかった。現代の若者たちには、自己形成の一要因として、祖父母の世代からの影響を挙げるというような事実や認識はなくなっているのであろうか。考えてみたい問題である。

なお、大家族制度がほぼ崩壊した現代においては、伯父（叔父）や伯母（叔母）が同居しているということ自体が非常に稀になっており、したがってかなり以前には見られたような精神的な影響も少なくなっていると推察されるが、上記後者のレポートにおいて「伯母が毎日のように本を読んでくれたことは私に広い分野への興味を抱かせ、そのことが現在の読書好きの私を創ったと考察できる」と述べられているのが、このような事実の存在を物語る唯一の事例である。

Ⅳ　学校

子どもは乳幼児期を主に家庭という場で家族との関わりの中で生活し、成長・発達していくが、満6歳になるとともに、学校という集団生活の場に入っていくことになる。もとより、現代の日本では、多くの子どもたちがすでに就学前の時期に保育所（園）や幼稚園での集団生活を経験しており、そのことの持つ意味は大きいと言わなければならない。

両親が共働きであるため、保育所（園）育ちの経験について触れているレポートにおいては、そのことを概して肯定的に意味づけているものが多かった。2例を紹介しておこう。「幼い頃から両親が共働きだったため、小学校に上がるまではずっと保育園に通い、小学校も低学年の内は学童保育に通っていた。両親と過ごす時間が少なく、相対的に同年代の他の子ども達や、保母、保父さんや学童保育の先生など親以外の大人とすごすことの多かったこの時期は、私という人間の形成に大きな影響を与えている。一つには親離れの早さである。（中略）もう一つは同年代の子ども達と過ごしてきた中で培われた社交性である。（中略）また、いろんな友達と遊んだり、学童保育、保育所の先生からさまざまな経験をさせてもらったことは、今の私にとって見に見えない形ではあるが大きな糧となっていることは確かである。」(男子)「私が生まれた頃は、まだ世間に育児休暇なるものが普及されておらず、共働きの家庭に生まれた私は0歳時から保育園に通う運命となった。月曜日から金曜日までは午前八時から午後六時まで、土曜日は午前八時から正午過ぎまで家庭外で過ごすという習慣がこの頃から始まった。実はその頃の

記憶はほとんどないのだが、指すいの癖がなかなか治らなかったとか、毎朝ぐずって保育園に行きたがらなかった等といったエピソードから判断すると、やはり親の愛情に飢えていたのではないかと思う。(中略) しかし、保育園に0歳から通っていたことで社会集団への順応能力を早くから身につけることができたのも事実だ。乳幼児期と言えば極めて依存的で、誰かに頼っていなければ生きていけない。そこで幼かった私は、他人と上手く接触する技術を体得していったのだと思う。今でもわりかし集団の中に上手く溶け込めるのは、この頃に身につけた技術によるところが大きいと思っている。そんなこんなで、保育園という環境の中で私は無意識のうちに自己教育力を養っていたように思う。」(女子)

1．教師

学校という集団生活の場で、子どもたちは、親以外の大人、強い関わりを持たざるを得ない大人に出会うが、それが教師である。とりわけ、小学校時代の子どもにとって、その人間形成に及ぼす教師からの影響は大きいと思われるが、その事実について多くの学生たちが異口同音に述べている。

まず、それらの意見の中で最も多いのは、教師が自分を積極的・肯定的に評価してくれたことがきっかけとなって自信を持つことができるようになり、よい方向に変わっていった、というものであった。この種の記述はかなり多かったが、それらの中から典型的な事例をいくつか引用してみよう。「小学校3・4年の頃は怒られてばかりだった私が、5・6年で担任になった先生からは、よくほめられるようになった。(中略) この時期に私は自信を持つようになり、積極的に行動するようになった。」(男子)「自信が持てないことへの解決法は、やはり褒めること、励ますことだろう。事実、私も絵を描いたり歌を歌ったりするのは好きではなかったのだが、小学校の担任の先生に褒められたのが原因で自信が持てるようになり、だんだん好きになっていった。これは小学校3・4年生の頃だったが、この時期は私の自己形成における大きなポイントになるだろう。」(女子)「小学校に入って、私はとてもよい先生と出会った。その先生は、けじめをつけるところはつけて生徒をしかったりもしたが、子供が伸び伸びと育てるようにほめることを忘れない人だった。」(女子)「私は幼い頃、おっとりとした子供だった。良く言えば『おっとり』だが、動作が鈍く、何をするにしてもスローモーで、いわば『知恵遅れ』のような状態であった。また、体も小さく、体力もなっかたので、人よりかなり成長が遅かったのだと思われる。小学校一年生の時の担任は、そのような私を『感受性の強い子』だと認めて下さった。人より動作が遅い分、多くのものを見て、聞いて、感じているのだと母にアドバイスを下さったこともあったそうだ。もしも当時、私がただの愚鈍な子供だと見なされ、落ちこぼれのように扱われていたらと思うと、ぞっとする。今の自分があるのは、当時親や先生から自分を否定されず、認められていたことも大きいと思う。」(女子)

この他、人間として、人生の先輩として尊敬できる教師に出会ったという記述も少なくない。教師に人間の理想像を見いだしたともいえよう。「私が影響を受けたのは小学校の高学年の頃お世話になった男の先生である。小学生の少年にとって、若い男の先生には、一つの男の理想像を見てしまうものであり、今でも私はその先生を尊敬している。」

類似の例として注目されるのは、学童保育の指導員との出会いである。「もう一つ、特筆すべきことは、学童保育の指導員との出会いである。学童保育とは、1年生から4年生までの鍵っ子たちを、7時まであずかってくれる所である。そこの指導員は、教育熱心な方で、劇やペープサート、キャンプ、バザー、スポーツ、学童保育内の通信の発行など、様々なイベントを考え出してくださり、また、1年生から4年生まで全員が協力してそれに取り組むよう指導してくださった。(中略) 身内以外の大人で、私が心から信頼した一番最初の人物である。彼から何かを学びとった、という訳ではないが、私もあんな大人になりたいなぁ…といった、理想の大人像が形づくられたのは確かなことである。」(女子)

そのほか教師からの肯定的な精神的影響を述べたものは、小・中・高校と非常に多かったが、その中で特筆すべきは、教師の発した言葉が大きな支えとなり、励ましとなったというものである。2例を挙げる。ある女子学生は、小学3年生当時の担任の先生の「自分が人にされて困ることは、人に対してもやってはいけません」という言葉に対して、「非常にありふれた、誰もが一度は耳にしたことのある言葉である」のに、「あれから十年余りすぎた今も、こうして明確に覚えており、かつ、私という一人の人間に影響を与え続けているのだから不思議である」と回想的に述べている。これも女子学生だが、中学3年生の時のこととして、「『人と人とは鏡のようなもの、こちらからにらめばにらみ返す、こちらが握手の手をさし出せば向こうもさし出す』。私が苦しんでいる時に、国語の教師がくれた言葉だが、私はその1年間、この言葉に支えられてきた」と述懐している。

上記のような肯定的諸例に対して、当然予想されることでもあるが、教師に対するさまざまな批判的記述もなされている。

まず、厳しすぎる教師により自分の性格がゆがんだと認識している例。「5、6年の担任は女性であったが、ひどく厳しい教師であった。事あるごとに叱られ、わがままだといわれた。そして、その頃から僕は少しずつ変わり始めた。(中略) その頃は小学生であり、叱られることがとにかく嫌だったために『とにかく自分を教師の前で出さないようにすればよい』というような短絡的な思考に走ってしまった。つまり、教師の前で『良い生徒』を演じていれば、少なくとも叱られることはないという考えだ。(中略) 小学生にとって学校の教師という存在は絶対的であり、その後の人格形成において大きな影響を与える。その教師が一方的な価値観を押しつけ、安易に暴力をふるうことに問題はないのだろうか。」(男子)

「僕は大人が嫌いである。(中略) 僕が大人を嫌いになった要因、それは教師である。

小・中学校時代の先生だ。生徒によって差別する先生、生徒に勉強を教えるだけが仕事だと思っている先生、偽善者、暴力教師、あげていけばきりが無い。」(男子)

「えこひいきされる」体験を通して教師を批判的に見るようになったという事例。「私はずっとえこひいきされる子であった。(中略) 最初の頃は気分がよかったし、褒められるようなこともした。でもあまりにもえこひいきされると、いかに小学生といえども気付く。これはおかしいと。『みんな公平に』って言ってるけど、そうじゃない。絶対に先生が間違っていると感じ、それ以来、教師に対して不信感を持つというか、人一倍批判的になった。」(女子)

2．友人

人間の成長と発達において、友人からの影響や友人との切磋琢磨が大きな要因になっていることは、一般によく言われているが、学生たちのレポートにおいても、その点については多くの記述がなされている。その内容は、千差万別といえるほど、個性的であり、きわめて多様であるが、敢えてそれらに通底する基本的な特徴を述べれば、他者である良き友人に出会ったことによって、自分に無いものを見いだし、そこから人間として大事なものを学ぶことができた、もしその友人に出会えていなかったら、現在の自分はなかったろう、というような内容に要約できると思われる。幼稚園時代から、小・中・高校時代、さらには浪人時代を通してさまざまな経験が記されているが、典型的と見なされる生の声をいくつか引用してみよう。

「幼稚園の頃、クラス全員で外でお弁当を食べている時に、私は自分のお弁当箱をひっくり返してしまい、中身を全部地面に落とした。その時、仲良しの女の子がさっと自分のお弁当を差し出し、半分食べていいと言った。そのさりげない優しさは私の心を打ち、彼女のような心配りができるようになりたいと思った。このことを初めとして、彼女からだけでなく、多くの友人との出会いと触れ合いを通して学んだことは非常に多い。厳しい忠告をくれたり、楽しい気持ちにさせてくれたりする中で、私は何かを手に入れている。それが自らを高めていると確信する。」(女子)「親友と呼べる人が年齢に応じて何人かいます。その人たちから、私は多くのものを得ました。他人の自分とは違う考え方に触れたり、好みや流行などに関して刺激を受けたり、共感したり反発したり、というように、家庭内という狭い区域内に限られていた自分の生活を外界に広げる手助けとなりました。」(女子)「何よりも私という人格形成に一番大きく働いた外圧は、親（家族）を除けば、一人の親友との出会いである」と言う書き出しで、中学一年の時に同じクラスになった友人とのことについて次のように記している。「私たちは様々な時を共に過ごし、共に体験し、語り合って思春期を一緒に成長していった。彼女はとてもまじめで、その努力のおかげで、勉強にもスポーツにも長けていた。その上、尊敬するほど思いやりが強く、優しい性格であった。私はその影響を受けて、きつかった性格が丸くなり、人を思いやることを知った。高校生になってからも私たちは親しくつき合い、多くのこ

とを語り合いながら過ごした。(中略) 彼女と語り合うことがなければ、私は今ほど深く物事を考えなかったであろうし、毎日を何となく過ごすことに慣れきってしまっていたであろう。(中略)私にとって彼女との出会いはまさに人生の宝物である。」(女子)「僕は今のところ人生最高の友を中学の時に得た。彼らとはいまだに何かと連絡をとりあっている。一人一人考え方が違い、性格は本当にばらばらだ。(中略) それぞれ進む道は違うが互いに認め合っている。この連中と一緒にいると、勉強だけがすべてじゃないと思えてうれしい。それぞれが刺激し合うことによる相乗効果にはあらためて感謝したいと思う。」(男子)「高校入学当時、私はかなり無気力な生活を送っていたが、それが少しなりともいい意味で方向転換したのはある友人のためであった。その友人は我々の学年の首席であり、なおかつ人間的に大人であった。彼のお陰で私は自分の視野の狭さに気づく事となり、取りあえず学習面においてだけでも彼に近づこうと思い、結果として高校入学当時の学力レベルとは桁違いの大学にこれた訳であるが、人間性において彼に勝ったと思ったことは一度もない。」(男子)「高校時代は良い友人と出会えた。学校の帰りに寄り道をして、親には言えない悩みを聞いてもらい、その答えから様々な事を感じ、学んだ。私の事をよく理解してくれ、励ましてくれた。(中略) その友人がいなかったら、現在の自分はいないだろう。」(女子) 高校時代の友人について、次のように書かれている。「自分が何をしてよいのかわからない時期は、夢に向かっている友人に刺激を受けた。そして、同じ目標を持つ友人とは、互いに支え合い、悩みを分かち合ったり、多くのことを語りながら結びつきを深めていった。自分の思ってもみなかった発想に驚き、自分の発想の幼稚さに情けなく思った。自分と接触のあった人、一人一人から様々な影響を受けて吸収し、自己の内面が大きく成長した。」(女子)

以上の諸例からも、人生においてよき友をもつことのかけがえなさが実感できる。

3．その他

1）転校

学校時代の特別な経験として、転校という事実がある。父親の転勤により、その勤務地の学校に変わるという場合が多いのだが、学生たちのレポートの中にも、転校を自己形成の重要な要因として記述してあるものが4通あった。典型的な事例を2つだけ紹介してみよう。まず、その一つは、自己形成要因の第一のものとして、「二人兄妹の妹」という「家族内での自分の立場」を挙げた後、「現在の自分を形成しているもうひとつの大きな要因は、父の転勤で何度も転校したことだ。このことはとてもよかったと思う。いくつかの場所に行ったことで、視野は広がった」と述べているものである。もう一つは、父親の仕事の関係でしばしば転居し、4つの違う小学校に通ったが、「この経験が自分という人間を形成するのに大切な糧となったのだと確信できる」と記しているものである。この人（女子学生）の場合は、小学2年生で初めて転校した折には「人よりも割と神経質なところがあった私は、なかなか新しい環境になじみきれず、疲れてとうと

う熱を出してしまった」りしていたが、何度かの転校体験のなかで精神的に鍛えられ、「小学校六年生の最後の転校の時にはすっかり転校にあたっての心構えができていた。どのように前と違う環境に自分を適応させていくか、どのように自分の良い所を徐々に出していけば周りの人たちに受け入れてもらえるかを、自然と学んだのである」として、自己の経験を総括している。以上の内容からも窺われるように、転校体験は概して積極的・肯定的に捉えられている。

2）部活

学校生活の中で相対的に重要な位置を占めているものにクラブ活動がある。4名の学生が、自己形成の要因として特筆していた。そのうち、2例だけを紹介しよう。まず、一人は男子学生で、小学校4年時に野球部に入部し、さらに中高一貫の私立校に入学すると、即野球部に入部し、野球にのめり込み、いわゆる野球少年としての生活を続けるが、その経験を次のように総括している。「野球部で過ごした6年（高校も続けた）は非常に重要な期間であった。厳しい練習を通じて培った忍耐力や基礎体力、目上の人に対する礼儀、野球を共にやってきた友人等は、今後も役立つ、かけがえのない財産だと思う。野球部で過ごした6年間が、現在の自分の9割ぐらいをつくっているといっても過言ではないだろう。」もう一人は女子学生であるが、自己形成要因の第三番目のものとして、バスケットボールを挙げ、「中学・高校とバスケットボール部に所属していた。対人関係の難しさや、生活習慣の形成のほとんどすべてをバスケット部の活動で学んだ」と記し、その具体的な内容を述べた後で、「バスケットの技術以上に精神力の面で得たものは多かった」と結んでいる。4例ともスポーツ系の部であり、文化部の事例が記されていなかった点に、偏りが見られるかもしれないが、上記の内容は、いわゆる部活のもつ人間形成的な機能について端的に捉えているものといえよう。

3）いじめ

自己形成要因としての「いじめられ体験」を特記しているレポートは6通あった。まず、男子学生の例であるが、中学校時代のこととして「色白でやせていて、力もなく運動神経もなかった私は、いじめの格好の対象になったようだ。入学して程なく、Mに殴られたのをきっかけに、Mを中心とするいじめが始まった」という書き出しで、受けたいじめの具体的な内容が詳しく綴られた後、「そんな環境のもとで、僕はしだいに言葉を失っていった。必要最低限以上のことをしゃべるのは、相手にいじめるきっかけを与えることになる。目立たないことが身を守る唯一の術だった。それから感情を殺すことを覚えた。（中略）思春期のこの経験は、私に暗い影をおとした。何事につけても悪い方に、ネガティヴに考える私の性格はこの時に形成された」と記し、「私はこの時代を『暗黒時代』とよぶ」と述べている。読んでいても気持ちが萎えてしまいそうな記述内容だ。次には、女子学生のもので、小学校低学年の頃、動作が鈍く、気も弱かったので、クラスの男子数人からいじめられ、「登校拒否寸前まで追い込まれた」ことがあったが、中学生になってまたいじめにあい、「初めの頃こそ悩んだものの、当時反抗期を

迎えた私は、たとえクラス全体に無視されても屈する気は全くなかった。初めは強がりだったが、そのうちに孤独にも慣れた。そうなると、少し離れた視点でものを見るようになり、群れないと何もできない相手の弱さを見れるようになると、いじめはほとんど気にならなくなった」という形で克服していった例である。この他、いじめられた体験を通して、「人のいたみがわかるようになった」という内容のものも多かった。その一例。「小学校2年のときにはいじめにあった。(中略) それから何年もいじめっ子を憎み続けたが、今では人のいたみがわかるようになって、よい経験だったと思えるようになった。このいじめも現在の私をつくっている大きな要因である。」(女子)

4) 受験

「受験」は、現代の青少年にとって、学校生活における相対的に大きな比重を占めている。それゆえ、自分のライフヒストリーにおける受験の事実に触れているレポートは少なくなかったが、自己形成要因としてのそれに自覚的に言及した学生は3名だけであった。その内の2つは明確に肯定的内容のものであり、他の1つは批判的視点からのものであった。まず前者について、その一人は、小学校6年時に中学受験のため毎日塾に通う生活をしていた女子学生だが、その経験を「受験というと押しつけのイメージが強いようだが、少なくとも私にとっては、『自分からやる』という精神を養うことのできた機会だったように思う。まわりの友達も他の学校の子がいて、少しずつ違う考え方などを知ることができた」と捉えている。もう一人も女子学生であり、高校時代、「人生の一つの節目とも言える大学受験に直面」したが、「私にとって大学受験はあまり苦でなかった。むしろ非常に充実した日々を提供してくれるものであった。というのも、勉強する事が嫌いではなかったし、また人間科学部へ行って研究したいという明確な目標があったからである。大学受験合格を目指して、毎日毎日自分なりに計画をたて自分自身をコントロールする力を身につけていったと思う。(中略) 自己管理能力や忍耐力を養った時期であったように思う」と、その意義を認識している。後者の例は、男子学生の場合であるが、親の勧めで進学塾に通い、私立中学に受験して合格したが、進学後、自分とは違う「裕福な友人が多く」、彼らの「ブルジョワ的な感覚」になじめず、その経験から、「次第に自分を庶民に近づけよう、特別でありたくないという感覚が芽生えてきた。そして自分の意志もなく私立中学へ進学したことが失敗のように思えてきた」というものである。

5) 浪人体験

いわゆる浪人時代の体験を自己形成要因の一つとして特記しているレポートは15通を数えた。それらの記述内容は、一人ひとりの人生史に即してきわめて多様であるが、敢えて共通するものを引き出すとすれば、その時期の経験を肯定的・積極的に捉えたものが多いという特徴をもっている。その捉え方は、「浪人時代は今までの人生の中で一番充実していました」や「私にとって最も重要な時期は“浪人”の時だった。本当の意味で自分を見つめることができた。(中略)自己を形成するという点で大きかったと思う」

という共に女子学生の言葉に端的に表現されているが、類似の内容のことが異口同音に述べられている。浪人生活を過ごした多くの者が予備校に通っていたようであるが、そこで同じ境遇の友人たちとの心の交流から得たものが大きいと述べられている。例えば、親元を離れて、寮付きの予備校に通っていた男子学生の場合であるが、「寮では夜中まであれこれと語り合う友達ができ、その友達と支え合いながら乗りきることができて、良い財産ができたと思う」と記している。「一年間の浪人生活で生涯の友人とも思える友人を得ることもできました。浪人はしてみるものです」(女子) という発言もあるが、さらには、高校時代とは違う意味で、尊敬できる教師と出会うことができ、人間として深い影響を受けたという内容のものもあった。なかにはしかし、「何につけても『誰かと一緒』でなければならなかった性格を変えようと一大奮起し、宅浪（予備校などに行かず、自宅で勉強する浪人生のこと）を決行した」者もいたが、「何か月もほぼ一人でいることに慣れ」ることによって、「幼児期に築かれた『誰かに依存する』性格的傾向」を変えることができた、とされている事例もある。以上には肯定的評価の面が強いものを紹介したが、当然ながら必ずしもそうでないものも見られた。病気のための入院とそれに伴う二浪生活を余儀なく経験した男子学生の場合であるが、「単純にいい経験として捉えることのできない悪い面も」あるとし、それは「人生に対する前向きさの喪失、消極性、無関心な態度の助長である」と述べている。さらに、これは女子学生のレポートだが、複雑な思いを吐露した深刻な内容のものもあった。「何故浪人したのか、と今聞かれると、すべきでなかった、としか答えようがない。しかし実際は浪人時代の持つ意義を一口で言うことはできないと思う」という書き出しで、まず浪人をした原因について、「自分に対する過剰評価」等々の自己分析を行い、予備校にもほとんど行かなかった浪人生活について語りつつ、「ひどい孤独の中で、自分とは何か、何故自分はこんなところにいるのか、を問い続けていた。そして私が孤独と自己嫌悪の中でもう我慢ならないと思ったときに、1年も終わった」と述べ、「浪人時代を通じて私は、特に自分自身に対して辛辣な目を向け続けることを覚えたと思う。その結果私は冷たくもなり謙虚にもなった。色々な視点で世の中を見ることも覚えたと思う。そして分別の重要性を思い知った。(中略) 現在、私の陥っている状況は、浪人中に身に付けたものの膨大さのため、ともすればそれにひきずられている状況だと思う。私の性質に加えて、新たに身につけたばかりの孤独に対する見方、辛辣さ、そして柔軟な物の見方などと、どのように折り合いをつけていくか、というのが私の当面の課題だと思う」と結んでいる。同じ浪人体験といっても、そのことの意味づけは個人によってこれほど異なるのである。

6）女子校

以上のほか、学校に関わるものとして特記すべきは、女子校で学んだことの特質やメリットについての記述内容である。中高一貫の私立女子校出身者は、「6年間この中で生活してきて、自分で何でもやらなければならないということを思い知らされた。なぜなら、共学のように男子と女子でその能力に応じて分担するということができなかった

ので、例えば文化祭などで、はしごを使ってよじ登り、展示物をはるだとか、重い荷物を１階から３階まで運ぶだとか全て自らやらねばならなかったからだ」と記しているし、また、公立女子高校の出身者は「女子校とはいえ、そのパワフルさはすごいものがあった。女の子だけで何でもできるということを身を持って体験できた。生徒会活動も、学校行事もみんな生徒達のものだった。生徒が自由に、しかししっかりと運営していた。女性の自立の場だったといえると思う」と述べている。女子校は、戦後の共学理念に反するように見えて、実は女性に一層の活力を与え、その自立を促す教育の場となりえているというべきなのだろうか。

Ⅴ　その他の諸要因

家族や学校以外にも、人間形成に影響を及ぼす多くの要因があるが、学生たちが記述している中から特に重要と思われるものを取り上げてみよう。

１．阪神大震災

人生には全く予期しない出来事に遭遇することがあるものだが、平成７年度入学の学生たちは大学センター試験直後にあの阪神・淡路大地震を経験している。５人の学生たちが、被災地にあって体験したことや考えたことをレポートの中で記述している。一人ひとりがそれぞれ体験した状況を具体的に詳述しているが、本稿では、この中で考えたことの内容を中心に紹介してみたい。典型的な例をいくつか引用する。「この地震で、生活はめちゃくちゃになってしまった。自然の力の途方もなく大きいことを知り、人間の非力さを知った。しかし、非力ながらも小さな力が集まれば大きな力となれる、という協力することの素晴らしさも同時に知ることができた。この地震で、友人や恩師を失った。人の命について、こんなに考えたことはなかった。私の価値観や物の考え方を一番大きく変えたのは、この地震である。」(女子)「大学受験を控えた私にとって、センター試験直後のこの震災は精神的にもこたえた。取りあえず勉強どころではなかった。(中略) 復興期においては、代替バスの係員の人の優しさ、同乗した人との会話など、地震前には想像もつかなかったほど人との触れ合いのありがたさを感じた。自分は一人で生きているのでなく、社会の中で人々と共にあることを実感した。」(女子)「私の人格形成に多大な影響を与えたのは、今年の１月17日未明に起きた『阪神大震災』である。はっきりいって、人生観さえ変わってしまったといっても過言ではないと思う。(中略) ラジオなどで、どんどん死者や被害の状況を伝える報道を冷静な気持ちで見ることはできなかった。以前に北海道南西沖で起きた地震報道を見て、他人事としか思っていなかった自分が、非常に恥ずかしく思えた。(中略) 私は受験の最中であったが、受験勉強の苦しさや辛さが些細なことに思え、一時は大学受験を断念しようとさえ思ったほどに衝撃を受けていた。」(男子) 以上の記述内容は、リアリティにあふれており、その事

実の重みと影響力の大きさを物語っているが、同時に、この事例は直接体験ということの重要性を教えてくれているともいえよう。なぜなら、直接に被災していない学生は、レポートの中でこの大震災に一人も言及していないからである。

2．死の体験

身近な人の死について記述している学生が10名いた。曾祖父、祖父母、父母、兄弟などの肉親や、教師や友人などの死であるが、それに直面し、それについて考えたことが自己形成に影響を及ぼしたとしているものが多かった。典型的な内容のものをいくつか紹介してみよう。「自分とはいったい何であるのかといった問題を自分自身の手で考え始めたのは小学生の頃であったと記憶している。大本のきっかけは、曾祖父の死であったと推察されるが、小学生のある時期に、死んだら一体その後はどうなるのだろうかと毎晩のように考えていたことがある。最初のうちは生物全体の死に関して考えていたのだが、次第に自分の死について考えるようになった。そして、自分とは何であるかを考えるようになったのである。これらの問題は当時の私の手に負えるものではなかったが、この様な問題を考えることは私の精神面での成長に役立ったと思われる。」(女子)「二人兄妹の末っ子」という「家族の一員としての位置」を第一の形成要因だと述べた後で、「私の自己形成の要因と考えられることの第二として挙げられるのは、私が小学三年生の時に起こった出来事である。それは、兄の急死である。我が家は、もともと５人家族で、私には兄が２人いた。本当に突然の事であった。そのことをきっかけとして、私は比較的早くから、人間の死の意味や、生きていることの、命をもって生まれたことの尊さを実感した」と記している。(女子)「私が大阪大学の人間科学部を志望したことの原因をたどっていくと、中学２年生の父の死にいきつく。父は私の人格形成に大きく関与しており、父の死はその後の私の生活に大きな影響を及ぼしているように思える。父の死以来、私は人の生や死に興味をもつようになっていた。その頃、『病院で死ぬということ』という本が話題になっており、担任の教師に勧められて読み、私は初めてホスピスの存在を知った。(中略) そんな時、母の買った雑誌をたまたま読んでいたら、ホスピスのことを書いたページがあり、その中で柏木教授のことが紹介されていた。それで死の学問というものがあり、大阪大学に行けばそれが学べると知って、それまで文学部の国文科を目指していたが、人間科学部を第１志望とするようになった。」(女子) 三大形成要因として、家族（両親や兄とのかかわり）と学校（教師や友人からの影響）を挙げた上で、「最後に、自分を大きく変えたのは、死を知ったことである。高三の夏に、友人を交通事故で亡くし、『人は死ぬ』ということを痛い程に教えられた。それまで、死とは老人や病人だけのものであり、縁遠いものであった。まさか自分の身近に起こるとは思えなかったし、ましてやその前日に笑顔で手を振った彼女に起こるとも思えなかった。(中略) それまで興味のなかった仏教について学ぶようになり、死というものを自分なりにではあるが、正面からとらえるきっかけとなった。自分の死についても、

現実味をもって考えられるようになり、現代の医療問題や、脳死、臓器移植、そして老人福祉についてなど、多くの分野に関心が広がった。そして自分の生活態度が大きく変わった。(中略) 命は、いつ終わるともわからないものである。明日死んでもいいと思える生き方を心がけている。一日、一日を精一杯生きることである」と述べている (女子)。以上の記述内容から、「死」は人間にとって根本的な問題であり、これも直接体験の重要性を物語っている事例だということができるであろう。

3．その他

上記のほか、父親の外国勤務に伴う海外生活と帰国後の帰国子女としての経験、比較的短期のホームステイや一年間にわたる交換留学の体験、また、音楽、日記、恋愛、宗教、スポーツ、読書、原っぱ、海等々を重要な自己形成要因として明記している学生がおり、それぞれの記述内容には興味深いものも少なくないが、すでに紙幅の余裕も無いので、それらのうちのごく少数だけを紹介しておこう。

「高校時代のホームステイ」について次のように述べられている。「見た目が幼い事もあって、常に子供扱いされていた私が、初めて一人の自立した人間として見られたのがホームステイの時であった。また、それまでの私は服装や行動等を周囲に合わせる傾向があったが、ホームステイ先のアメリカで『個性を持つのは当然の事』という考えに直に触れた事によって、多少周囲と異なっても、自分の考えで行動し、個性を発揮する事に自信を持てるようになった。さらに、ホームステイ中には何度も『大学で何を勉強したいのか』『将来何をしたいのか』と尋ねられた。『高校生にもなったら、自分の考えを持ち、将来の目的について考え、その目的に向かって行動するのが当然だ』という考えに基づいたこれらの質問を受けるうちに、自分はまだまだそういった事を深く考えていない事に気づき、反省させられた。そのような経験から、私は親からの自立を試みるようになり、自分自身について考え直し、いわゆるアイデンティティを見つめ直し、さらに、新たなアイデンティティの確立を試みるようになった。」(女子)

「水泳という『スポーツ』を通して、いわば外面的ともいえる『肉体』が鍛えられただけでなく、内面的な『精神』までも鍛えられた。私が小学生であった当時は、塾に通うか、私みたいにスポーツスクールに通うかしなければ、他の学校の生徒との交流がほとんどなかった。私にとって、そのスクールに通い、様々な個性を持った人達と交流を持つことは、マンネリ化した日常の学校生活から解放してくれるものであったし、私の心に新しい刺激を与えてくれるものでもあった。」(男子)

「現在の僕という人間の人格が形成されてきたいきさつを考えてみると、まず小学校頃から読んできた本の影響をかなり受けていると思う。(中略) 僕が読書らしきことをしたのは伝記を読んだのが最初であった。(中略) 続いて読み出した小説は当時の僕にはかなり新鮮なものに感じられ、僕は大きな衝撃をうけた。(中略) 小説の中では主人公達は住んでいる世界こそ違えど、それぞれの境遇の中で自分自身の存在や人生につい

て真剣に考え悩んでいた。そしてその主人公達の無器用だがひたむきな生き方に心を打たれ、僕は自分の生き方について少しは考えるようになった。(中略) このように今の僕の人格の中には読書によって形成された部分があるのは確かだ。」(男子)

「今までの自己形成において非常に大きな影響を与えたものが自己の恋愛体験であると思います。自分にとって初恋と言えるものはおそらく小学校五年の時であったと記憶しています。(中略) 二番目の恋愛は、中学一年生の時でした。(中略) 恋愛体験というのは、本当に人間を一回りも二回りも大きくしてくれるものだとつくづく思います。そうこうしている内に高校生となり、高校二年生の時にまた新たな恋愛が始まりました。しかし、今回の恋愛は今までのものとは異なっていました。それは、今までの恋愛では結局告白もしないまま自然消滅という経過をたどったのですが、今回はついに告白をしたのでした。そして人生において最初の失恋というものを経験しました。その時のショックと言ったら、今思い出しただけでもすごいものがありました。しかし、今となったら、それも貴重な経験であったと思います。あの経験があったからこそ、今も恋愛に対して真剣になれると思うし、相手の気持ちもより分かるようになったと思います。」(男子)

「私が中学校・高校と通った学校はキリスト教の精神をもとにした私立校だった。毎日の礼拝や週一回の聖書の授業で学んだ様々なことは気づかないうちに私の中に浸透してきているようである。(中略) 中学・高校と多感な時期をキリスト教に触れて育ったことは、私というものを語るとき、見落とせない、とても重要な要素であるようだ。」(女子)

「小学生の頃をふりかえってみる」と、「何よりも現在の自分をつくる要因となったのは『学校』ではなくて『原っぱ』でした。子供たちのまわりから『自然』がどんどん姿を消していたので、私たちは少しでも『自然』とふれ合おうと必死になっていたような気がします。そういった中で、『原っぱ』は絶好の (自己) 教育の場であったと思います。ただ草と木が生い茂るだけの何もない広場で、誰にも教わらずに自分たちで『遊び』を考え出すことによって、自己教育力、つまり自分で自分を教育する力も養っていたのではないでしょうか。」(男子)

「私の祖母の家は日本海に面した所で、長期休暇のたびに遊びにいった。夏は毎年のように海岸から1キロ程離れた所にある島へ泳ぎに行った。底の見えない深い海の中を見ていると何ともいえない哲学的な気分になり、生命の神秘や、人生の意味など、さまざまな思いが湧き上がってくるのである。私が人間科学部にきた動機は「人間」について総合的にさまざまな面から学びたかったからだが、この「人間とは何か」という問いは海の中を見つめるうちに漠然としつつも、生まれてきた問いなのである。生命は海から誕生してきた。だから不思議と生命について考えさせられたり、波間に漂っていると、落ち着いた、どこか懐かしい気分になるのであろうか。」(女子)

ある女子学生は、高校生になって始めた「日記」について次のように書き記している。「私は自分が思ったこと、感じたこと、考えたことを明文化することを始めた。これは本当に素晴らしい記録であると、自分で思う。『日記』などという安っぽい名前で呼び

たくないくらいである。(中略) すべてが言葉に表されるわけではないけれど、整理しながら書きつくるうちに、自分を客観視するもう一人の自分が現れて、常に『自己』を保ち続けることができた。そしてその作業が続けば続くほど自己を知り、確立することができ、自分のことをとてもすきになった。」(女子)

Ⅵ むすび

本論において、自己形成の諸要因を学生たちがどのように捉えているかについて、その特徴的な内容を、レポートの記述に即して、家族、学校、その他という順序で見てきた。このことによって、ある程度、現代学生の形成的自己像を窺わせる特色が示されたといえよう。しかし、上記のような叙述形式を取ったため、一人ひとりの自己形成の過程を重視し究明するという課題に取り組むことはできなかった。学生たちの多くがこれまでの成長と発達の過程を振り返りつつ自分が大きく変わった時点と契機についてそれぞれ個性的に興味深い記述を残している。例えば、幼児期には人見知りで、おとなしい消極的な子どもだったのが、小学校に入り、先生や友達からの一言とか、ある特定な体験とかをきっかけに、見違えるほど活動的で積極的な性格になっていったという事例などが多く報告されている。そのきっかけがいかにして主体的な自己形成の要因となり得たのかという問題は、きわめて重要な究明課題であると思われる。しかし、本稿はすでに指定の紙数を大幅に越えていることもあり、このような課題には、機会を改めて取り組みたいと考える。

また、レポートのテーマ (課題文) の中に、「『自己教育力』の形成という問題をも含めて」という文言を入れていたため、多くの学生たちが、「自己教育力」について、個性的な人生体験と独自な思索に基づいて、固有な論を多様に展開してくれている。その中には傾聴すべき内容のものも見受けられるが、今回はその検討結果の記述も割愛せざるをえない。

さて、このようなレポートを学部一回生の夏休みに課したことの意義については教師として事前にそれなりの意識をもってはいたが、実際に学生たちのレポートを読み進むなかで、やはりこの課題をこの時期に提示して良かったという確信を深めることができた。そのことを傍証する内容を幾人かの学生たちが書いてくれてもいる。「現在の自分とそれをつくってきた要因を改めて分析することで“自分”に対する課題がはっきりしたように思う。このようにしてまた自己を形成していくのだと思う。」(女子) 「大学入学という人生の節目で、再び自己をふり返る機会を得たが、そうすることによって、また大学4年間の生活によって、いい方へ自分を形成できる要因にできたら、と思う。」(女子) これは、母親との激しい葛藤を経験してきた男子学生の言葉であるが、「自己形成史の作成は私にとってつらいものがありましたが、これから進む道には必要なものだと痛感しました」と記されている。さらに、これは女子学生だが、自分というものの探究

を大学4年間の課題として設定し、「自分を本当に好きになれるような自分に変えて行こうと思う」と述べたうえで、「今まではこの考えに自信があまり持てなかったが、これを書いているうちに少し自信がついてきた。(中略) このような課題のおかげで、一度冷静な立場に立ち、改めて物事を新たな視点から見ることができるように思う」と記している。

おわりに、学生たちが大学生活への抱負や将来への展望を述べている文章をいくつか引用することによって、本稿の締めくくりとしたい。

「大学に入って一番今までと違うと感じるのはやはり自分の責任で自分をつくっていかなければならないということである。(中略) 勉強も含めて、自分が一番やりたいことを探すことが当面の自分の課題であると思う。」(女子)

「また今、人間科学部に来て、大学生活を送るうちに、私の人生に様々な味つけをしてくれる出来事もしくは人々に出会うだろう。そして、もっと『自己』というものを認識していくはずである。これからも、『自分で考える』ことにより、私らしい人生を送っていきたいと思う。」(女子)

「私は、大学生の間にもっと幅の広い人間になろうと思う。いま、私は自分を教育する、ということがわかりかけてきた。いままでは周りから与えられ、成長してきたが、自分からいろんなことを経験し、成長するということを覚えはじめている。」(女子)

「これからも自分は自分を形成し続けていくことだろう。(中略) 自分が経験したことや出会った人から何を吸収するかは、自分次第である。自分の選択能力をもっとみがきあげ、理想像に近い自己を形成したいと思う。」(女子)

「これからの私の生き方については、まだ模索中であるが、今まで環境によって形成された私を基盤に、自覚的に選択し続けることで、これからの私を自分で創っていきたい。そうした、主体的な意志こそ、自己教育力の源泉である。」(女子)

注

1) H. Roth, Pädagogische Anthropologie Bd.Ⅱ, Hannover 1971, S.46 (平野正久訳『発達教育学』、明治図書、1976年、43頁)
寺崎昌男編『教育名言辞典』、東京書籍、1999年、268－269頁

2) 拙稿「教育人間学の課題と方法—H. ロートの所論を中心に—」、『大阪大学人間科学部紀要 第19巻』1993年、127－168頁

3) 注1) と同じ文献、S.47 (邦訳書、44頁)

Developmental Self-Images of Students today in Japan
— Analysis and Interpretation of Term Papers of Students at the Faculty of Human Sciences Osaka University —

Masahisa HIRANO

This paper aims to investigate and grasp developmental self-images of students today in Japan. For this purpose, the author analysed and interpreted term papers of students at the Faculty of Human Sciences Osaka University. The task of these term papers, which the author assigned students, was to describe their own life history, payng regard to basic factors of their personality development.

This paper consists of following six chapters :

Ⅰ Theme of This Paper
Ⅱ Genetic Factors
Ⅲ Family
　1. Parents
　2. Brothers and Sisters
　3. Grandparents
Ⅳ School
　1. Teachers
　2. Friends
　3. Some Other Factors
Ⅴ Other Factors
　1. The Big Earthquake in Hansin District
　2. Encounter with Other's Death
　3. Some Other Factors
Ⅵ Conclusion